

2.1 文学部

2.1.1 理念・目的・教育目標

【評価項目 0-0-1】 理念・目的等

(必須要素) 大学・学部等の理念・目的・教育目標とそれに伴う人材養成などの目的の適切性

(必須要素) 大学・学部等の理念・目的・教育目標等の周知の方法とその有効性

【評価項目 0-0-2】 理念・目的等の検証

(選択要素) 大学・学部等の理念・目的・教育目標を検証する仕組みの導入状況

(選択要素) 大学・学部等の理念・目的・教育目標の、社会との関わりの中での見直しの状況

【評価項目 0-0-3】 健全性・モラル等

(選択要素) 大学としての健全性・誠実性、教職員及び学生のモラルなどを確保するための綱領等の策定状況

<2003年度に設定した目標>

文学部が教育研究活動の中心に据える理念は次の二点に集約される。

1. 建学の精神に則ったキリスト教主義教育
2. 人文学の修得による全人的陶冶

このような理念のもとに文学部が目的とするのは、人間存在と人間の営み・文化に関わるあらゆる問題を追究する人文学の高度な研究を行うとともに、これからの世界において知的・文化的により豊かで人間らしい生き方を可能にする社会の実現に貢献しうる知性と教養をそなえた人材を育成することである。つまり文学部を構成する学科・専修がそれぞれの分野において高度な研究活動を行いつつ、相互の連携によって柔軟で充実したカリキュラムを提供して人文学の幅広い教養を学生に与えることである。

上記の理念・目的から、より具体的な教育目標を以下の5点で示す。

1. 基礎・基本を重視した教育を通じて、主体的に課題を設定し、これを解決できる能力を養成する。また同時に人文学的素養を重視し、真の知性と品格をそなえた人間の育成をめざす。
2. 高度専門職および研究職の養成（大学院教育）を視野に入れながら、その基盤となる強固な学問的知識や技能を提供し、学問的な立場から社会に貢献できる能力を養成する。
3. 広範で多様な学問領域にふれることを通じて均整のとれた柔軟な思考能力を涵養するとともに、広い視野と優れた方法をもって創造的に考え、自ら行動することのできる能力を養成する。
4. 豊かな人間性と幅広い教養をそなえたよき市民として社会に重要な貢献をなし得る能力を養成する。
5. 授業規模に留意するとともに、演習などでは適正な履修者数を定め、それを維持する。それによって一人一人の学生と向き合い、その個性を重視することを目指す。

(現状の説明)

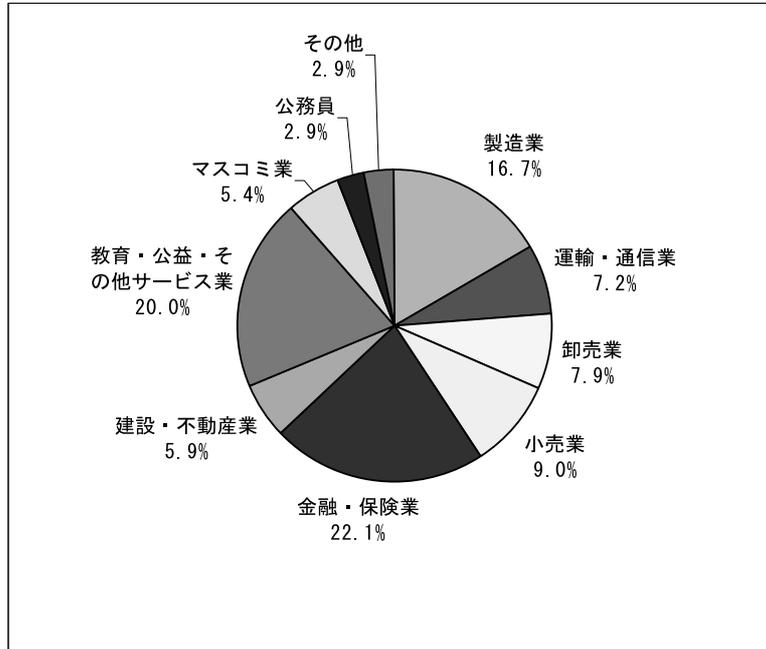
文学部では従来、建学の精神であるキリスト教主義に基づく人格の陶冶と並んで、幅広い教養と卓越した専門の学識を学生に兼ね備えさせる教育を行ってきた。1963年に9学科の体制が整い、その後、1994年には大学設置基準の大綱化に伴う大幅なカリキュラム改革を実施し、教育における専門化と細分化を推し進めてきた。ちなみに、旧制大学の法文学部時代も含めて、卒業生の累計は2004年度までで29,968人を数える。しかし、社会の変化に応じて、学問の進歩による専門の分化を推し進めると同時にその有機的統合をはかった教育の必要性を痛感し、上記のような理念・目標のもとに、2003年に改組を行った。すなわち、9学科制から3学科制への移行であり、そこで意図されたのは、学科・専修間によりよい連携を図ると共に、カリキュラム上の制約を緩和してより広範で柔軟な履修を可能にし、それによって深い学識と幅広い視野をもつ人間を育成することであった。そのためには、深い教養と高い専門性の双方を満たすことができるカリキュラムの編成が不可欠であり、カリキュラムの構成単位をなす学科組織の改編を必要としたのである。改組は、2004年度末（2005年3月）で2年を終え、2006年度を完成年度としている。（「2.1.2 教育研究の組織」参照）

これまでのところ、基礎・基本を重視した教育と専門的能力の養成という目標に関しては、両者を視野に入れて適切な教育が行われている。具体的には、低学年において専門への特化をできるだけ避け、複数分野の有機的連関を重視した基礎的教育が実現されていること、高学年においては学科を越えた自由な授業科目の履修の機会が保障されるとともに、研究科目や演習科目を中心に高度な専門性の獲得が可能な教育が実施されていることなどが挙げられる。さらに、広範で多様な学問領域にふれ豊かな人間性と思考能力の育成という目標に関しては、人間性を重視した、均整のとれた柔軟な思考能力の育成に適宜な力が注がれている。また、授業規模に関しては、適正な履修者数という点から演習科目においてそれはほぼ達成されているが、科目によっては多人数で、一人一人の学生と向き合うという側面が難しいケースも見られる。以上の諸点から鑑み、大卒においては上記理念・目標の達成に向けた進捗状況は順調に推移していると言えよう。

理念や教育目標については、全学生に配布する大学要覧やホームページで周知を図っている。

こうした教育を通じて得た専門分野を生かして大学の研究者、そして高校・中学の教員や公務員（博物館学芸員）を輩出するとともに、広い人文的教養を生かして一般企業で活躍する人材を生み出してきた。次に、2004年度の実績別就職先のグラフを提示する。2004年度は700名のうち、就職448名(民間企業419名、官公庁13名、教員16名)、大学院進学60名(本学大学院45名、他大学大学院15名)、その他192名であった。

<2004年度就職状況>



(点検・評価の結果)

基礎・基本を重視し、学問を幅広く吸収させるという姿勢は「人文演習」「入門科目」「総合科目」などの導入によって、ある程度実現されている。そして、基礎・基本を重視し裾野を広げた結果として、学生に多様な学問領域に触れさせ、幅広い教養を身に付けさせることができている点は評価してよい。他方、専門的領域の教育については、2005年度に初の演習所属学生を迎えた時点でもあり、その適正な実施を見守る必要がある。なお、キリスト教科目の履修やチャペルアワーでの講話などを通じて入学以来、徐々に豊かな人間性が育まれてきている学生も少なくない。

(改善の具体的方策)

上記理念・目標の達成は楽観視されるものではなく、今後とも各教員がそれを念頭に置いて学生と真剣に向き合う必要がある。そこで、以下のような改善策を講じる。まず、改組の理念を体現している「人文演習」「入門科目」「総合科目」などが目標どおりに運営されているかどうかを各科目担当者会議や運営委員会において検証し、その結果を各科目担当者にフィードバックして改善に役立てる。学生による授業評価の結果も参考にする。次に、専門科目間に有機的な連携が備わり、有効な教育効果をあげるため、各学科および専修ごとに有効な授業を施し、課題や問題点についてはカリキュラム委員会において学生による授業評価の結果をも参考にしながら検証し、その検証結果に基づいて委員会が改善の方途を考える。